



保護司章

緑地区保護司会だより

みどりの風

緑地区保護司会

第 19 号

発行 者
緑地区保護司会発行責任者
会長 森 章編集
広報部

私たちが『この街に住んで良かった。これからも住みたい』と思うことはどんなことでしょうか。道路・公園・学校等が整い、近くにスーパーやコンビニがある、便利に生活することが出来る所かもしれません。さらに、隣近所の付き合いが良かったら最高です。

でも、そんな街でも事故や犯罪が多かったら、安心して暮らすことはできません。特に大都市になればなるほど犯罪の無い街は考えられません。

しかし、私たちみんなの力で犯罪を少なくすることは出来ると思っています。

現在、緑区役所、南警察署等



自分たちの街、自分たちで
住みやすい街に！

緑地区保護司会 会長 森 章

人はみな、
生かされて
生きてゆく。
更生保護シンボルマーク

行政機関及び防犯協会、交通安全協会そして各町内自治会、青少年育成委員会、各小中学校、PTA、民生・児童委員会、地区パトロール隊等が各種活動を行い、犯罪防止に取り組んでいます。

私たち、緑地区保護司会でも、法務省が主唱する『社会を明るくする運動』をメインテーマとして①幼稚園児の塗り絵展②小中学生の作文募集③中学校での出張講座④防犯パトロール⑤緑区ふるさとまつり会場での、広報活動・更生保護関係のクイズやアンケートなどを実施しております。

このようなみんなの地域活動が、刑法犯の認知件数を年々減少させているものだと考えられます。

一方、犯罪をしてしまった人が数年後に、再犯者になってしまいう割合が上昇しております。一度犯罪者になってしまつと、『就職口がない』『お金がない』『居場所がない』などがその要因といわれています。

このため、国では平成二十八年に「再犯防止推進法」が公布・施行され、千葉市でも「再犯防止推進計画」が令和四年度に策定されたところです。

今後は、さらに地域関係機関・団体と連携を強化し、犯罪や非行を防止するとともに、罪を償った者にも、社会の一員として迎え、孤立させないよう、種々の活動を行っていきたいと思えます。『安全で安心して暮らせる街のために！』

2023 第4回ぬりえ展 あすみが丘プラザ

社会を明るくする運動



法務省のマスコットキャラクターのホゴちゃん、サラちゃんのことを知ってもらうため、緑区内の幼稚園、保育園の年長さんにぬりえをお願いしています。

もうすでに15の園のみなさんが協力してくれました。

ぬりえを通じて、成長したときにホゴちゃん、サラちゃんのことをわかったり、ご家庭で保護司の活動が少しでも話題になったりしたらありがたいと思います。

更生ペンギンの
サラちゃん

第1回（令和2年）

- ・平山保育所
- ・誉田保育所
- ・ふたば保育園
- ・美光保育園
- ・ナーセリー鏡戸保育園
- ・明徳土気保育園

第2回

- ・土気中央幼稚園
- ・わかさ保育園
- ・あすみ東保育園

第3回

- ・聖母マリア幼稚園
- ・ほまれ幼稚園
- ・花水木幼稚園

第4回

- ・あすみ中央幼稚園
- ・AIA土気保育園
- ・AIAあすみ保育園

更生ペンギンの
ホゴちゃん

緑区第31回ふるさと祭り 11月5日(日)昭和の森にて



保護司会のコーナーで、来場者の皆様に「社会を明るくする運動」のアピールを行いました。

・保護司の仕事について、パネルの3択クイズに答えてもらいながら、理解してもらいました。

クイズの例・・・保護司って何をする人？ ふたたび罪を犯さないために必要なのは？

・薬物乱用についても、3択で答えてもらいました。

クイズの例・・・薬物乱用って、何回使用したら？ 薬物乱用の影響は？

子供たちには、次の3つのコーナーを設けました。

・ホゴちゃん・サラちゃんの塗り絵・ペンギンの折り紙・更生ペンギンの紙芝居



社会を明るくする運動

作文コンテスト応募者及び作品

(今年度は小学校二百一十三名、

中学校三百九名の応募がありました)

日本更生保護協会理事長賞 (優秀賞)

千葉県推進委員会委員長賞 (県知事賞)

渡邉 心結 あすみが丘小 六年 「みんなでつくろう明るい社会」

佳作

水品 彩花 誉田中 二年 「居場所がある社会」

緑地区優秀作品

宮崎 京介 土気中 三年 「人との関わり方」
内沢 菜 土気南中 三年 「今を見つめて」
高見 咲希 土気南中 二年 「犯罪者などが立ち直れる社会とは」
藤田 翔子 おゆみ野南中 三年 「私が目指したい地域社会」
角間 将悟 平山小 五年 「たよれる社会を目指して」
窪岡 竜羽 土気小 六年 「支えてもらえば一人ぼっちじゃない」
小川 冬惺 あすみが丘小 五年 「思いやりの種」
川嶋 菜 おゆみ野南小 六年 「その道の先で待つ笑顔の為に」



みんなで作ろう明るい社会

あすみが丘小学校 六年
渡邉 心結

私は、保護司である祖父にインタビュをして、「よくみる・つながる・受け入れる」の三つが社会を明るくする力だと思いました。

まず「よくみる」についてです。この間、学校で更生保護についての手紙が配られました。その手紙には、「更

生しようと努力していても、仕事に就けず再犯してしまうなどして、更生できない人が多い。」と書かれていました。ここで少し考えてみてほしいです。あなたは、今、更生しようとしている人を雇うか面接しています。この人を雇いますか。雇いませんか。世の

中のほとんどの会社は雇ってくれません。あなたはどうかですか。どんな理由で雇うか雇わないかを決めましたか。では、あなたが判断する材料となった理由ですが、本当にきちゃんと更生しようとしている人をみて言っているものでしょうか。どれも色眼鏡越しでみて判断していませんか。更生しようと努力している人たちは、自分の犯した罪を認め、罪と向き合い、再び世の中の一員になろうとしている人たちです。色眼鏡を外して、その人柄を見ることで再犯が減ると思います。また、何かをたのまれることで自分が信頼されている、必要とされていると感じられて自信になると思います。だから、更生するために仕事をするというのは、更生する人の大きな力になると思っています。

次に「つながる」についてです。祖父が「昔は周りの人とのつながりが強かったが、今は弱くなってきたしまったね。」と言っていました。また、年々犯罪や非行が増えてきているそうです。祖父の話とこの現状から「つながりが強いと犯罪や非行は少ない。反対に、つながりが弱いと犯罪や非行は多い。」ということが考えられます。では、以前のような強いつながりを持つにはどうしたらよいのでしょうか。私たちができることは二つあります。一つ目は「地域の行事に参加する」です。地域の行事は周りの人と交流し、つながることのできるよい機会だと思います。しかし、「ちよつとハドルが高いな。」と思う人もいるかもしれません。そこで二つ目は「あいさつをする」です。あいさつをすることは一番身近でやりやすいと思います。あいさつをすることお互いの心と心がつ

ながります。このように自分にできることを実際にやってみることで強いつながりが生まれて、私たちがくらしやすい社会になるのではないでしょう。最後に「受け入れる」についてです。祖父に保護司の仕事内容について教えてもらいました。更生しようとしている人と話す「面談」をしたり、薬物乱用や未成年者の飲酒・喫煙など犯罪や非行を減らすために呼びかけたりしているそうです。更生のための「面談」は今と昔ではちがいがああるそうです。今は、市役所で面談をしています。昔は保護司の人の家で面談をしていたそうです。祖父が保護司になったばかりの頃は、家で面談をしていたそうです、それを聞いて「すごいなあ」と思いました。なぜそう思ったのかというと、更生しようと努力している人とはいえ、やっぱり犯罪や非行をしてしまった人を家にに入れて話をするというのは不安で勇気が必要だと思ったからです。また、祖父が「保護司をするのは家族の理解と協力がなきゃなんだよ」と言っているのを聞いて、祖父を支える祖母もすごいと思いました。祖父のように更生しようとしている人を受け入れてくれる人が増えたら立ち直りやすい社会になると思います。

このように社会を明るくするために、私たちにできることはたくさんあります。「よくみる・つながる・受け入れる」といったことを実際に行動に移すことで社会がほんの少し変わっていくと思います。あなたの理想の社会はどんな社会ですか。その社会を創るのは他でもない、あなたを含めた私たちです。この社会の主人公は私たち。みんなでつくろう、明るい社会。

施設見学研修(千葉ダルク)

ダルクとは、麻薬・向精神薬・睡眠薬・シンナー・覚せい剤等の薬物やアルコールに依存している人たちが、毎日行われるグループセラピーを通して、依存から抜け出して社会的にも回復することを手助けする「リハビリ」施設です。

私たちは、午前中、千葉ダルクの見学をしました。生活支援員の石田様より、施設の概要、リハビリのための一日の生活や回復プログラムについて説明を受けました。その後、入所者が取り組んでいる沖縄の伝統芸能・琉球太鼓エイサーのDVDを視聴。エイサーは、回復に向けて仲間とのコミュニケーションや距離感を身に着けるために最高のプログラムだということです。

仲間とのグループミーティングも見学させていただきました。テーマに沿って、自分の思いや考えを出し合い、聴き合うという活動でした。自分を見つめなおす大事な時間だと思いました。

午後は、依存から回復をした方が入所している長生村のグループホーム「一松ハウス」と「驚ハウス就労継続支援B型事業所」を見学しました。この作業所では、お弁当を作って販売することによって、生活の自立を目指しています。一松ハウスの農場で作った野菜を使っているとのことでした。

石田様の案内と説明に、自立を目指して努力されている方々の努力に学ばせていただきました。



千葉市立誉田中学校での

統括観察官による出張講座



里見有功 氏

六月二十二日、中学校の五時間目(五十分)を利用し、里見有功統括観察官が『更生保護についての出張講座』を行いました。保護司八名も参加し、研修の機会としました。中学生には、少し話が難しいかな、きちんと話が聞けるかな、と心配する中、講演は始められました。全員が最後まできちんと聞いていたことに感心しました。統括観察官のパワーポイントによる説明が、中学生にも分かり易く、心に訴える内容でした。中学生であっても、投げかけ次第で、十分興味を持ち、理解してくれると確信しました。

講演後、広報部員が、中学生にアンケートをお願いしました。その中からいくつかを、紹介します。

- ・「犯罪」という言葉は、中学生には縁がなく難しい。この講座の内容を「知っている」か「知らない」かで、大きな差がある。この年代で更生保護について知ることができたのはよかった。
- ・罪を犯すと、人生が生きづらくなる。絶対に犯罪に手を染めたくない。
- ・将来、更生保護の仕事がしたい。
- ・犯罪をしたり、関わったりしないように自分の生活を見直したい。
- ・家族にも、今日の話を伝えたい。
- ・あらためて、校内に掲示されている、社会を明るくする運動の「生きづらさを生きていく」のポスターを見てみたい。

中学生が更生保護施設の設立のきっかけになった金原明善と川村矯一郎の話、BBSのことに、興味を持ち質問があったので、社会を明るくする運動部が、お礼とともに答えを送っています。

これらのことを通して、本当にこの出張講座を実施していただいて、よかったと思うし、これからも若い世代に働きかけていきたいと強く感じました。

統括観察官をはじめ観察所の皆様に、「出張講座」を実施していただいた事に、深く感謝いたします。